

JRの匠たち

書道の醍醐味は 緊張と集中、そして「余白」

JR東海ユニオン関西地方本部
大阪第一運輸所分会

かわしま ゆか
河嶋 侑華さん



コーナータイトルの「匠」の字は、今回新たに河嶋さんに書き下ろしていただきました。

絵を描くように字を書く

これを書いたのは、JR東海ユニオン関西地方本部大阪第一運輸所分会の河嶋侑華さん。東海道新幹線の運転士だ。東京―新大阪間を最高時速285キロでつないでいる。

河嶋さんが「習字」を習い始めたのは3歳からだ。もちろん、その頃の記憶はない。ただ、先生が見本に書いてくれた縦の線と右の払いの組み合わせが字ではなく絵に見えて楽しくなったのを覚えている。

『「永字八法」なんていわれますが、書に必要な8つの技法を習っていたのだと思います。先生の書いた右の払いに縦の線を足すとどう見てもハイヒールに見えてしまう（笑）。だから、私は絵を写すように字を書いていました」

小学校6年生のときに書道塾で高等部師範を取る。高校生を指導できる免許状だ。しかし、中学でバスケット部に入ったのを機に習字の稽古は、あっさり辞めてしまった。

「部活が忙しかったから……。もったいないという気持ちは、まったくありませんでした。でも、筆を持つのは好きだったので、時々、気ままに書いてはいました」

同じ字を同じ書体で書いても、書く人によって個性が出る。その日の気分によっても字は違う顔を見せる。「書きたいな」と思ったときに筆を取ると、うれしくなるほどよい出来映えの作品が書けたりすることがあるのだという。

そんな河嶋さんがもう一度、書に向き合おうと思ったのは、大学に進学してからだ。小学校教員養成課程に進んだのは、子どもの頃に書の基本を指導してくれた書道塾の先生の影響もあったに違いない。

「専門が芸術だったので、その中で一番やりたいものを選んだら、当然のように書道になりました」

実技試験のとき、揺った墨を焼き豚のタレの容器に入れて持っていたエピソードを笑いながら披露してくれた。

「周りの学生たちは立派な専用容器を使っていたんです。私の墨は焼き豚のタレのにおいが混じってしまい、ちよつとシヨックだったけれど、それで緊張が解けたからよかったかも……」

大学時代はグループ展などにも積極的に参加した。『古今和歌集』の最古の写本といわれる高野切をまねて、かなで宮沢賢治の『銀河鉄道』の1節を書いたりした。墨とかなだけでなく、何かをプラスして視覚に訴えたいと、黒いストッキングに金墨汁で詩を書いて、後ろから光を当てるなど実験的な試みもやってみた。

就職活動の時期がやってきた。教師になるつもりでいたが、友達に誘われて訪れたインターンシップで、電車の運転士になった先輩の話聞いた。それまで電車にも運転にもまったく興味はなかったが、とにかく「かっこいいな」と思った。

運転士と書道 類似する緊張感

そして、今、河嶋さんは、東海道新幹線の運転士をしている。新幹線のハンドルを初めて握ったときの緊張



「酷暑 夏期輸送完遂」の際に制作された書の制作風景。

張と感動は一言では語れない。
「約1300人のお客様を乗せた新幹線が動いた時のことは、今も心と体がしっかり覚えてます。責任のある仕事だと実感しました」
職場にも慣れた頃、彼女の書道の腕前を知って、さまざまなセクションから、依頼が舞い込むようになる。昨年の夏は畳1枚弱の全紙に「酷暑夏期輸送完遂 感謝」と書いた。新幹線に見立てて書かれた「感謝」と落ち着いた「夏期輸送完遂」の文字のバランスは絶妙だ。
「誰しも字を書くときは、大きさや形を考慮するけれど、一番大切なのは『余白』なんです。指導教授は『必要

白』と言っていましたね(笑)。最近、私は、仕事にもこの余白が必要だと思おうようになりました」

東京から新大阪まで「一本の新幹線を動かす」ためには、車掌をはじめ周囲の人たちと協力しなければならぬ。人の力が合わさって見事に遂行できたとき、その仕事は適度な余白をつくり、きれいに枠にはまっているのだという。さらに書と運転の共通点について聞いてみる。

「たとえば、『一』という字を書くときの書き始めと最後の緊張感と集中力。これは、新幹線をブレーキで停車させるときの感覚と似ていますね。うまくいったときに自らを振り返る気持ちの流れも同じです」

河嶋さんは、気持ちと時間に余裕があると、無性に筆を持ちたくなるという。字を書くことでリフレッシュできるという。ここが運転とは異なるところだろう。最後に好きな漢字を聞いたら、すかさず「轍」という答えが返ってきた。轍は通過する車の輪、輪の跡のことだ。

「画数が多い漢字のほうが書きやすいんですよ。職場でも、この字を書いてほしいというリクエストが多いですね」

河嶋運転士の新幹線が走り去った

後の線路を頭の中に思い浮かべたら、その線路はいつのまにか筆が描く2本の線になった。その筆致は、勢いよく、かすれながらもどこまでも続いていていた。



子どもの頃練習していた書道の右の払い。縦の線を足すと、たしかにハイヒールに見える。



顔彩絵の具など色も自由に取り入れるのが、河嶋さんの書道スタイル。



所属する大阪第一運輸所分会の依頼で制作された2020年謹賀新年ポスター。



年季の入った「印泥」と呼ばれる朱肉と印。



愛用の硯と大・中・小の筆たち。作品に応じて使い分けられている。